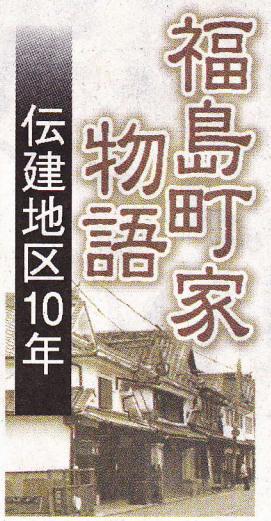
西日本新聞　2012年(平成24年)5月26日　土曜日

福島町家物語

伝建地区10年



■□1□■

うなぎの寝床は奥深し

発見

中庭から陽光が差しこむ20畳の座敷で、デザイン会社を経営する白水高広さん(26)が、幅30センチ、長さ6メートルの紙を、巻きもののように広げてみせた。

昨年から始めた「もんぺ博覧会」(27日まで八女市本町の八女伝統工芸館で開催中)の会場に展示するために作ったもので、もんぺをはいた男性がサイクリングを楽しんだり、ミシンに向かったりしている写真を貼っている。これまでの農作業着のイメージとは懸け離れたもんぺの着こなし方を紹介しようとの試みだ。

「古いものから新しい魅力を発信したくて。自分がおもしろく感じたものに驚き、共感してもらうことが楽しいんです」

2010年2月、結婚を機に佐賀県上峰町から、白壁の町家が並ぶ八女市福島地区に移り住み、昨年12月には2年近く住んだ町家から今の町家に引っ越した。明治後期に建てられた造りと、部屋数の多さが気に入った。入り口は高さ約1・5メートルの引き戸。しゃがみながらくぐると正面に通り土間、右側に和室3部屋をつなげた20畳の座敷が広がる。その奥は中庭を挟んで左右に分かれ、トイレや風呂場が設計されている。道路に面した玄関側の間口が8・5メートルしかないのに対して奥行きは19メートルもあり、まるで「うなぎの寝床」だ。

6年前に修復されたばかりだが、冬の寒さは強烈。土間と居間が続いているため、ストーブやエアコンでは間に合わない。ただ、火鉢を使うと意外に暖かいという。「遠赤外線効果なのか、気のせいなのか、古い建物にはそれにあった暮らし方があるみたいですね」

意外な発見はまだまだある。板戸の奥に隠し階段がある一方で、勝手口側の板壁は隙間が多く中がほぼ丸見え。「まあ徐々に慣れていきますよ」と笑う。

町の移り変わりにも「奥深さ」を感じている。福島地区の東側にある土橋商店街では、スナックのママたちから1960～70年代に八女一の繁華街としてにぎわったころの様子を聞く。

腹巻きに札束を挟んで飲みにくる男性客、肥だめを風呂と間違えて入った酔客、10人もの客に一斉に食い逃げされた話…。懐かしそうに振り返るママの話は、今のひっそりとした印象の福島地区とは違う活気と猥雑さがあった。

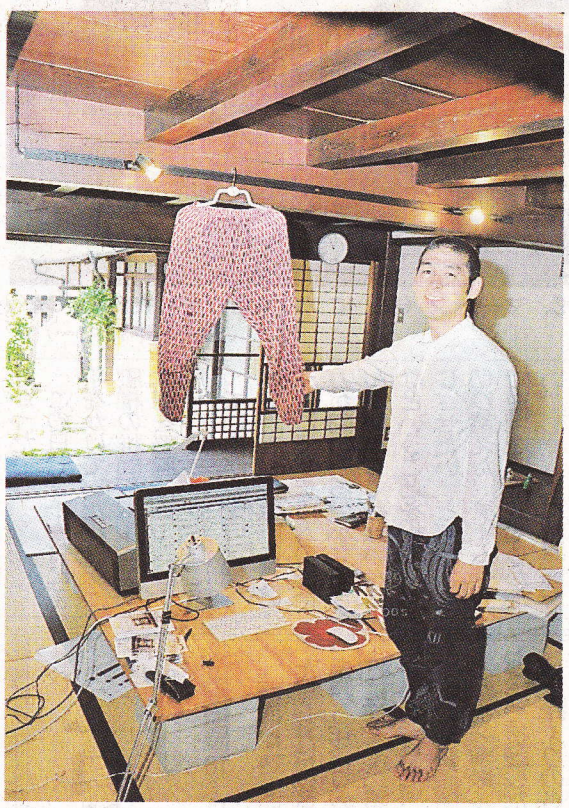
福島地区に住んで半年が過ぎた2010年11月、ママたちの「全盛期の一枚」の写真を等身大に拡大して切り抜いて展示する「昔のお嬢様展」を開催、時間を超えた交流を楽しんだ。

7月からは座敷をギャラリー兼セレクトショップに改装してオープン、八女市の木工職人による弁当箱や陶芸家の作品などを展示販売する予定だ。「奥深い魅力をどんどん発信していきますよ。一度入り込んでみてください」。店名は「うなぎの寝床」と決めている。

◇　◇

福島地区が国の重要伝統的建造物群保存地区(伝建地区)に選ばれて10年。この間、移り住んで来た人たちの暮らしや仕事、活動の場に生まれ変わった町家は28軒に上り、町に新しい風を起こしている。人々はこの町のどこに心を引かれ、何を求めているのか。古くて新しい「福島町家」の門をたたいた。

(糸山信が担当します)



(上)町家の座敷を使ったギャラリーのオープンに向けて準備を続ける白水高広さん(下)色とりどりのもんぺが展示販売されているもんぺ博覧会の会場

第2回もんぺ博覧会

27日まで、八女市本町の八女伝統工芸館。自作用のもんぺの型紙(千円)を使ったもんぺの作り方を解説。久留米絣(がすり)工房4社が作ったもんぺやハーフパンツ(7800～1万円)も販売。同館＝0943(22)3131。